

酪農の村造りについて

(2月5日久保政夫氏講演要旨 於落合中学校)

まず最初に現在私達の置かれている農業の在り方について一通り考えて見たいと思います。

終戦後世界的に食糧が余って来ているが、ただ日本とドイツだけが不足している。去年の5月アメリカのC. C. Cが調査した処によると

小麦 10億4,400万ブッシェル余っている。

トウモロコシ 11億4,600万ブッシェル余っている。

米 2,900万グロストン余っている。

綿花 1,300万トン余っている。

大量にのぼるこの農産物を政府が抱えたのでは困るのでM. S. Aによって海外に売り、その金で、その国の防衛力を増強すると言う事をやっている。アメリカではこれをやらないと農業恐怖が起るのである。だからアメリカでは農業法を作り小麦はいくら、米はいくら、トウモロコシはいくらしか作ってはならないと言う法律を通過させている。又今まではオーストリア及び中近東等に余剰農産物を売っていたが現在ではそれらの国も農業が発達して来て農産物を輸入する必要がなくなって来た。只その中で日本だけが足りないのである。

そこで日本だけなぜ足りないのだろうか？と言う事を考えて見る必要があると思う。

日本は終戦後食糧増産1点張りで政策を進めて来た。特に米、麦、諸類に重点を置いて来たのであるが政府の考え方が世界諸国と交渉している間に、これは米や麦を作っただけ居たのでは駄目だと言う様に変って来た。米や麦を精出して作っても安い農産物が海外からどんどん入って来たのでは日本の農業は破滅である。これは適地適産でなければならないと言う様になって来て昨年から河野農相により新農村建設が叫ばれた。そして農業生産性の向上をやらなければならないのではないかと言う事になった。

アメリカでは米1石が3,000円相当で生産出来るのに日本では石1万円もかかる。それはアメリカでは機械を使うからだ。それでは日本も機械の導入すれば良いのではないかと言う事になったが日本は農地がせまくてとても機械を導入する余地がない。アメリカでは

1つの田が40町歩もあって飛行機で種をまいたら田植えになり除草も機械でやり刈入れも機械でやってしまう。それだから安いのだ。日本の農業はこれから比べると昔とそう変っていない。まあ金肥を使う事と脱穀機を使う事が変わっているだけだ。だから日本は農業改革をやらなければならないと言う事に結論された。

そして3つの政策をあげた。それを掲げると

一. 将来性のある農産物を作れ。

二. 農業を機械化せよ。

三. 重点を酪農に置く。

と言う事であり、もっと詳しく説明すると

一. 将来性のある農産物とは矢張り中心は米、麦であり、重点をそこに置く事に変わりはないが、例えば米について見ても反当り米を作るよりも有利な作物は何か不利な作物は何か？と言う事とその地区々々で研究して見る必要がある。そして一方日本全体から考えて見ると反当り米作より有利な作物は果樹、高級野菜と酪農であり麦が一番いけないと言う事になる。而し麦がいけないからと言って土地を遊ばして置くよりはいいのではないかと言う事になって皆さん作っておられるのでしようが、これを何とか有利な作物を見出してそれに転換して行かなければならない。

二. 次に機械化であるが之は矢張り果樹、及び酪農経営によって日本は機械化出来ると言う事になったのである。

三. 次に酪農であるが戦前は米、麦類穀物を食物の80%必要としていたが、戦後は70%に落ちている。これを人類発達の面から考えて見ると人類が発達するにつれて穀物の需要は減り、それ以外のものが次々と増えているのである。だから日本も穀物以外のものを食糧に取入れて日本人の体位を向上しなければならぬと言う事になる。それでは一体どうして機械化するか、どうして酪農化するかと言う事が問題となって来るのである。

そして結局そのような事は自分一人では実現出来ない。どうしても共同化によって達成しなければなら

岡山畜産便り1957.03

ないと言う事になる。例えば牛乳でも自分一人が出して加工するのではなく、皆んなが出してそれを集乳して加工するのだから自分一人位と思ってその乳の中に石礫を入れて置くと全体の乳の質が下って来る。どうしても一つの村なら村、部落なら部落がよく連絡してお互いに立派な乳を出さなければ全体としての乳の質は向上しない。このように今後の農業は農家全体に関連のある産業、共同化の出来る産業に重点が置かれるものと思う。

酪農は年々進歩しており昨年は一昨年に較べて20%生産高が上っているがもう5年もすると乳牛頭数は倍になると言われている。この様に全国に酪農が盛んになって来ると何時かは乳が十分に供給出来る時代が必ず来るに違いないが、酪農を始める場合にはこの様な事も考慮に入れておかなければならない。そして如何にしたら乳を安く生産出来るかと言うことを今から研究しなければならない。5年後に於ける乳の値段が今の相場で売れるとは誰も保障しない。だから酪農家は何時の時代に於ても如何にして乳を大衆に合うように安く生産するかと言う事を考えて置かなければならないのである。

私の地方も酪農が盛んになって来ておるのですが、1頭の牛に年間7,000貫の草を食べさせています。而し草だけでは沢山乳が出ないから3万円飼料を買って食べさせて25石~35石の牛乳を毎年出している。なぜ、そのように10石も差があるかと言うと草の質によっても決り、乳の出るときに良質の草を食べさすと食べさせれないときの相異なるのである。甲、乙、丙の農家があっても草の作り方がみな違い、自分の中に合わせて草を作っているのである。急に角乳の出るときに良い草をふんだんに食べさせる事が最も大切である。

そしてその35石の乳を1合5円に売って175,000円となる。そしてそれから3万円の飼料代、牛の償却費、労賃、雑費等を見積って、1頭当たりが12万2,000円となり結局5万3,000円の純収入が得られる。まあこれは最高乳量の場合ですが、而し糞尿はもらっている。牛は大抵7腹位であるが草をふんだんに供給して飼うと10腹出しても乳をしぼれるものもある。又草で飼わないと栄養のバランスがとれなくなる。又催乳ホルモンの強く働く程乳は沢山出る。牛をなぐったりする

と乳は沢山出ない。牛に好かれなければならない。こちらが牛を好いただけでは駄目である。そして乳は機械的に出るのではなく、吾が子に吞ますために体の栄養を出すのであり母体はそれだけ痩せるのだから牛と機械は違うのである。これを考えないで牛に大して食べさせずに置いて乳ばかりしぼると、牛が早く退化し病気になる。だから良い草を沢山食べさす事が必要である。

そして種々総合して結論を出すに草を安く作る事が酪農の秘訣になって来るのである。私の処では年間の収入で土地を良くする事に全力を注いでいる。土地が良ければいい草が出来るからである。だから米作りを止めても草を作る方が良いと言う事になるのである。水田に草を作っても水田を潰すのではなく米を作ろうと思えば何時でも作れる。この辺では水田に草なんか作るのはもったいない。だから山につける。而し山につけるのは余程の努力をしなければ出来るものではない。だから水田に草を作って酪農でもうけて、その力で山にいどんで行くのである。山を開くと言う事は土地の革命であり、これは大きな事である。現在開拓地は沢山有るが殆どが山を下りたり副業の方が本業になっているような状況である。これは改草はしたが建設がこれに伴っていないからである。であるから山にいどむ前に水田でもうけて酪農の基礎をかためてそれから山にいどんで行く事が大切である。

例えばここに6反の経営地を持っているものがあるとす。そして反に2石出来るとすれば12石生産出来ていたものとする。而しそれだけではとても生活出来ないで和牛を飼って年々バクローから痩せた牛を入れて肥えた牛を出し5~6,000円もらって、それでも足りないので人夫に出てようやく食っている有様であった。そこへ和牛のかわりに乳牛を入れて見た。そして1日6升の乳を出した。1合が5円で1日300円の乳を出す。而し300円の内200円の飼料を買わないと乳が出ないので結局1日100円しか収入がない。だから貧しい人は日当300円の人夫の方が余程良いと思うだろう。しかし人夫に出ていたのでは20年たっても30年たっても農業は良くならない。ところが乳牛を飼うと毎日200円損をしているようで実はそうでない。それは農業の基礎が建設出来るからだ。始めの内は悪くてもしまいいには良くなる。それは人夫に出るのは一

岡山畜産便り1957.03

年中は出られない。年間の内よく出ても100日出たらいい方だろう。100日出ても日当300円では3万円にしかならないが乳牛を飼うと365日の収入がある。

私の処では採草地が多い。そして8月に採草して2,000貫の堆肥を作って投入している。土地をこやす事が金をもうける手段である。だから春夏秋冬何時でも採草して堆肥を作ると3,000貫位は出来るのである。そしてそれを土地に入れると6反で15~16石出来る。これを金に換えると3万円位すぐとれる。こう言う事を考えねばならない。そしてこれをもう一步進めると6反の耕地をその内2反歩草を作る。初めは麦の裏作を止めて草を作る。これが進んで来ると表作にも草を作るようになる。そして水田は4反しかないが酪農のおかげで4反で結構6反の収穫をあげる事が出来るようになる。そうやって来ると農業が面白くなって来る。こう言う事は青年の方が本気でやる。私の部落は畑が2反5畝あって水田は悪く小作地の多い村だった。ところがその内2反歩程草を作るようになった。よく働くんだが貧乏だった。草を作り出してから耕耘機を共同で購入してやるようになってから農繁期も農閑期もなくなって来た。始めの内は部落の人が貧乏なために農繁期ともなれば喧嘩腰で男等うかうかしている女に叱られる有様だったのが最近では笑いが混りゆっくり仕事をするようになって来た。ミシンは皆持っており、電気洗濯機も持っている。人間は人生僅かに50年。何も苦しむために生れたものではない。人生を有意義に送るために吾々はミシンを買い電気洗濯機を買っているのである。

このようにして村造りを明るく楽しいものにして行かなければならないと思う。

次に私の草の作り方を申し上げますが、だからと言って私の方法によれば、みな7,000貫とれるんだと思ってもらっては大きな間違いで、反当7,000貫とれるだけの準備があるからこそ草がとれるので、準備がなければいくらやってもとれるものではありません。ただ水田に草を蒔いてもその土地が、いくら地力を持っているかが問題であり、草に限らず作物には光が大切であるが光が多ければ多い程、地力は消耗される。これは光が当たると作物がよく出来、従って地力はそれだけ消耗されるからである。雨が沢山降っても土地のコロイドが流されて土地は痩せて来るのであり、各々

はこの年々痩せて行く土地を肥やして行かなければならないのである。これが問題である。トベネックの要素標に示されている通り一つの要素が欠けても、それ以上の作物は出来ないのである。日本の土地にはこの要素の欠けている土地が多いのであるからこれを満せば反当7,000貫の草を取れる事は間違いない。反当2,500貫しかとれないと言うのは要するにこの要素の何か欠けているからだ。

草を作る場合この土地にどの草が良いかと言う事を見るために、又自分の経営にはどの草が適するかを見るために10種類位作って見る。私の処の牧草及び飼料作物の作り方を述べて見ますと、

青刈大豆	5月下旬~7月下旬までに 自分の経営に合わせて播種する。
青刈トウモロコシ	6月上旬~7月中旬までに //
粟、キビ	6月上旬~7月中旬までに //
ヒエ	6月上旬~8月上旬までに //
カブラ	8月下旬~10月上旬までに //
イタリアンライグラス	8月上旬~10月下旬までに //
レープ	9月上旬~10月下旬までに //
レンゲ	9月に //
ソバ	7月上旬~8月中旬までに //
エンバク	9月上旬~10月下旬までに //
ジノコーパー	3月上旬~5月下旬までに //
	9月上旬~10月上旬までに //

カブを蒔く目的にもいろいろあり玉をとりたいのと茎、葉を取りたいのと2つあり9月には飼料の端境期でこのときにカブの茎、葉を取るのに利用すれば良い作物であり、この蒔き方は1尺5寸位に条播し地力が良かったなら30日位すれば1尺位、50日位すれば2尺位にはなる。そして30日位したら中の一溝のカブを抜き取る。又は所々間引く。それを飼料にし残ったのを11月~2月の飼料にする。そして抜取った跡にはイタリアンライグラス又はエンバクを播種する。又は一つの土地に平均に厚蒔きにならぬよう全面にカブを播き散らして置く。蒔くのも1回ではなく3回位に分けて播種する。これに平均に播くのが目的である。そして1ヶ月位したらその土地の中に2尺の間を取って2通りか3通り抜取ってしまう。これを通路にする。抜取ったカブは飼料にする。それから2ヶ月乃至3ヶ月の間に2~3回間引く。そしてそれを飼料にして行

岡山畜産便り1957.03

くのである。

又、トウモロコシの作り方であるがトウモロコシは6月頃に伸び盛りになる。だからその一番よく伸びる時期を播種する。これが秘訣である。そうすると飼料として100%利用出来るのである。播種方法は逆に1斗から1斗5升の厚播きにする。これは土地を最高度に利用する方法であり、こうすると播種後40日から50日頃には最も繁茂している状態になる。反当2,000貫位これとれる。2,000貫を越すような播き方をすると、一寸夕立があってもすぐグシャツとしてしまう。これは厚蒔きのために体が軟弱になっているからである。6月の伸び盛り以前に播種したものは到底これだけの収穫は上げ得ない。若し飼料が充分あってトウモロコシが余った場合は70日位でさっさと刈ってサイロに詰めてしまうのである。そして後の土地を使って行く事が効果的であり、このように土地は高度に利用しなければならない。

又ラジノクローバーで言うと反当50貫以上のタンカルをどの土地に限らず播種前に施用する。又溶成燐肥を反当3俵は施用する。堆肥は反当3,000貫施用しこれをすき込むのである。播く場合ラジノは反当2合～3合と言うようにうすく播くのである。又天候をよく見てから、土地の湿っているときとか、雨の降る日を見て播く事が大切である。播いた後日がカンカン照るような時はよくない。そしてこれは労力が要るので出来ないかも知れないが移植するのがよいのである。そして年に一度追肥としてタンカルを20貫～30貫溶成燐肥を1俵施用するのがよい。

以下質問に移ったがこれは速記していない。

(昭和32年2月5日 速記者丸山書記)